

知らぬが仏 『松尾邦之助とパリ その1 狂乱の時代』補遺に代えて

江 口 修

「知らぬが仏」という場合、視点の取り方でこの格言の趣は大きく変わる。まずは、周囲の人間がある人物の無知にもとづく愚かしい行為について同情をこめて言う場合であるが、これが普通であろう。だが、この場合にも辛辣な皮肉が入り込んでいることが多い。では当事者が自分の愚行を振り返った場合はどうなるだろうか。たいがいは「穴があつたら入りたい」、「なんで周りの連中は教えてくれなかったのか」、そのほか、「慙愧」、「無念」、「取り返しのつかないことを、…」という反応になる。もちろん「ここは知らぬが仏」を決め込み続けようとすることも可能だ。これが、論文の場合にはどうなるだろうか。「たいして読まれることもないから放っておこう」となにもせずに済ますか、「赤っ恥を搔くのを承知」で訂正と補遺を行うかのどちらかになる。よく「専門外」のことについては深い言及は避けた方がよいという自己規制が行われるが、おそらく門外漢が「知らぬが仏」の愚を犯してしまう可能性は高いという経験則からの判断であろう。

さて、今回筆者がこの愚を犯してしまったのだが、事の発端はあらまし次のとおりである。『松尾邦之助とパリ その1 狂乱の時代』（『人文研究』第115輯、2008年3月、小樽商科大学）を執筆途上、年表に記載した第一次大戦後のヴェルサイユ条約締結に関する注釈で西園寺公望公に触れたのだが、ついでに公に関する邦之助の評価を紹介してしまった（止めとけばよかったという後悔）。その行は「西園寺公が、詩人ゴーチエの娘と協力して出版した『蜻蛉集』（日本の古代詩歌仏訳集）は、日本文学紹介の嚆矢であり、その意味で西園寺公望は、おそらく日仏文化交流の先駆者であった。」（『風来の記 大統領から踊り子まで』、読売新聞社、1970年、頁94）以下、仏語タイトルまで付けて紹介したのだが、ここが門外漢の頓珍漢なところ。コピー＆ペーストまではいかないが、インターネット検索でヒットしたフランスのあるサイトの情報を鵜呑みにしてしまった。フランス語のサイトだったのでつい信頼してしまった（締め切りに追われることなくじっくりと精査すればよかったという後悔）。この情報はよく考えると、ジュディット・ゴーチエの遺産目録で、早い話いわゆる「売立て台帳」だったのだ。目録作りはプロでもその中の情報、いわんや聞いたことも見たこともない東洋人の名前などに関しては素人、誤記はあつて当然だろう。ついでに言い訳がましいことを言っておくと、高階絵里香氏の『異界の海 芳翠・清輝・天心における西洋』を当たろうと思っていたところ、残念なことに初版が売り切れで改定再版準備中だったため入手できず、YAMANOMOTOが当然山本芳翠であるという簡単な事実に行き着けなかった。拙論が刊行されてのち、再度情報検索すると、先駆的業績である高橋邦太郎著『「蜻蛉集」考』が突然現れた。最初の条件検索とあまり変わらないのになぜ以前はヒットしなかったのか不思議に思われたが、インターネット検索ではよくあることでもある。さっそく取り寄せて読んでみた、筆者の打ちひしがれようはご想像にお任せする。さらに追い打ちをかけるように、当の『蜻蛉集』原典が復刻版として日本で刊行されたのである。もちろんさっそく購入したが、完全にノックアウト、筆者は当然というか陶然（茫然）自失（なんでもっと早く出てくれなかつ

たのかという愚痴)。立ち直るにずいぶんと時間を要したことは言うまでもない。だが、どうやら補遺の性格を逸脱してしまっているようだ。恥の上塗りにならぬうち、後学のために、もちろん自分のためにも手に入った資料をもとに、補注として情報をまとめておこう。筆者にとっての時系列に則って説明して行くことをお許し願いたい。

1) 高橋邦太郎『「蜻蛉集」考』

この論文は共立女子大学紀要に「掲載された」ものである。たしかに第12輯（昭和41年）として『源氏物語における「あわれ」の一課題』小野村洋子著と2編収録の体裁になっている。がしかし筆者が参照したのは普通の抜き刷りではなく、奥付をみると、紀要十二輯の表題の左側に太字罫線の囲みの中には「蜻蛉集」考とあり印刷は昭和41年11月5日、発行は同11月10日、その下に非売品がカッコ書きされている。もちろん開始ページが70頁であるから、別刷りではあるが特別に単独に簡易製本して出版したものである。しばし高橋邦太郎について見ておこう。

高橋邦太郎は1898年東京生まれ。松尾邦之助は1899年生まれで1922年に東京外語を卒業。22あるいは23才で卒業ということは高橋邦太郎が順調に進んでいたなら、一才違いでも重なっていない可能性はある。ともかく邦太郎と邦之助、名前の近接ぶりも面白いが、筆者の読んだ限りでは互いへの言及はない。外語卒業後、東京帝大の仏文科に進み辰野隆に師事している。

かうした時曾て東大の佛文科の講堂で辰野先生の講義を聞いたわれわれははるかに辰野先生に感謝した。また、東京外語で井上源次郎先生の講義を聞いたわたくしは故先生に対して、心からお禮を述べたい氣持で一杯であった。というのは、たゝかひに勝つた時、相手をどう取扱ふかということ教へて下さつたのは實はあなた方だったのである。フランス文學やフランス語を教へて下さつたこと以外、それ以上に人間的なものをさづけて下さつたのである。辰野先生のことは人の知るとおりで、わたくしが、なにもつけ加えることはないが、井上源次郎先生についていへば恐らくわたくしの知る限りで、この人以上に洗練された日本人は見たことがないといつてもいい。井上先生は女子學習院教授で歿した人であるがモリエールを講義し、ユゴオの詩を教へながら、先生は「人間」を教へて下さつたのである。

（『隨筆タバコを語る』、出版社、出版年とも不詳、頁238-239）

この引用はNHKアナウンサーとしてヴェトナムに派遣され太平洋戦争終戦を同サイゴン支局長として迎えたときの占領軍とのやりとりをタバコを機縁に綴った文章の中に出てくるものである。辰野隆も『隨筆タバコを語る』に「紫煙さ・え・ら」と題して一文を寄せているが、パイプにまつわる蘊蓄披露である。つまり高橋邦太郎は東京帝大仏文卒業後NHKにアナウンサーとして入局し（当時は職制の区別が厳密でなく、記者も兼ねていた）終戦をサイゴンで迎えたのである。抑留生活は比較的楽だったようでほどなく引揚船「鹿島」でシンガポール経由で帰国している。その後NHKを辞し上智大学講師、そして共立女子大教授を務められ1984年に亡くなられた。東京帝大仏文科在学中から翻訳を手掛けられ、大学に奉職されてからは日仏交流史研究に打ち込まれ、『「蜻蛉集」考』はその成果のひとつである。氏が手に入れられた版はまさに800部発行されたうち、たった200部だけ印刷された山本芳水の彩色挿絵入りの豪華本の一冊である。入手したのは昭和7年とのことであるが、場所については言及がない。日本なのかフランスなのか。筆者は

おそらくパリで入手したのではないかと推測する（どなたか氏から直接話を聞かれた方がいらしたらお教え願いたい）。なぜなら、昭和7年すなわち1932年は渡辺一夫が文部省派遣の留学生として渡仏した年であり、そして高橋先生も、

卒業後、余り会ったことはなかったが、巴里遊学も、時を同じくしたので数回かの地でも、ヒョッコリ出会ったことがある。その時いつでも話は、巴里で掘り出した珍本についてであった。勿論、語り手は一夫君であって、こちらはいつも聞き手であった。

（『書痴銘々伝』、古通豆本59、日本古書通信社、昭和58年、頁4）

と語っているからである。「遊学」の「も」は口が滑ったようだが、高橋先生も相当な「書痴」であることは有名な事実であるから、二人の手柄話のひとつとして『蜻蛉集』は取り上げられた可能性は高い。32年は、松尾邦之助は読売の記者としてまたパリ通として知られ始めた頃である。大恐慌の暗雲が立ち込めるなか、まだまだ悠揚として「遊学」できた者たちと滞仏長きにわたるパリの生き字引のような悪くいえばパリゴロの親玉のような男、知っていたとしても親しくなるようなことはなかったであろう。

さて、『『蜻蛉集』考』の体裁だが、二部構成である。第一部は西園寺望一郎、「この行に当たって、わざと公望の本名を避けて望一郎と称した。これは敢えて公卿の身を一庶民として勉強したいという考えからである。」（同書、頁76）の仏留学と仏人との交流、そしてジュディツ・ゴオチエ（傍点原文ママ）について紹介している。西園寺のヨーロッパ時代の紹介としてはかなりまとまったものでくにゴンクール兄弟の日記から望一郎への言及をとりあげ、フランスにおけるジャポニスムの高まりに彼の果たした役割をクローズアップしている点はさすが慧眼というべきである。第二部は『蜻蛉集』の成立に関する論考で、ゴーチエ訳の和歌の原典探究も行われている。そして二部の最後に山本芳翠に関する紹介が配されている。短いので全文引用しておく。次に取り上げる高階絵里加氏の論考との対比に役に立つとも思われる。

「蜻蛉集」は山本芳翠の並々ならぬ協力がなかったら、これほどの美本とはならなかったであろう。

芳翠は嘉永三年（1850）美濃国恵那郡明知町に生まれ、はじめ、京都の久保田雪江について南画を学び、少壮にして上京、初代五姓田芳柳の門に入って洋画を学び、ワグマンCharles Wirgmanについて技を磨いたとも伝えられ、更に工部省美術学校に入って一層画業に専心した。

明治11年（1878）パリの万国博覧会に際し、これを機として仏国に留学、美術学校Ecole des Beaux-Artsに入り、ジャン＝レオン・ジェロームについて修行した。爾後、明治20年（1887）までパリを中心として彩筆を揮った。

この間、多才と、快潤温和な性格から、日、仏両国人間に多くの交友を持つに至り、依頼されてボア・ド・ブローニュ Bois de Boulogne公園内の某旗亭の天井画を描いたこともあり、ユゴオの国葬の状景をスケッチし、その作品をプラス・デ・ヴォージュ Place des Vogesのユゴオ博物館に残し、或いは某貴族の別荘の壁画を描きなどした。なお、オペラ座に出入をゆるぎされて、機構、背景、大道具の研究もし、パノラマの技法をも会得した。ジュディツ・ゴオチエの知遇も受け、賓客として邸へ招かれた。

これが、「蜻蛉集」を編むに当たって、装釘、挿画を一手で引き受ける機縁となったのである。

（同上、頁197、傍点筆者）

「快潤温和」とは漢字の簡潔な表現力に恐れ入る。だが、「某貴族の別荘の壁画を描き」については調査不足の感を否めない（自分のことはさて置くとして）。この芳翠紹介は、原注にもあり、ほとんどを隈元謙二郎『山本芳翠』に依拠しているようで、滞仏中にも解明するには至っていなかったようである。

2) 高階絵里香、『異界の海 芳翠・清輝・天心における西洋』

この論考が日本美術史上でも特筆されるべき論文らしいことは、門外漢にも聞こえてくるが、それを耳にしなくとも一読してその深さと広さ、そして実証の執念には打たれるのみ。筆者など忸怩たる思いに駆られ、これからは一読書閑人として生きようかと諦念する始末である。序章「ブルターニュの梅の木」のタイトルからして揮っている。つまり「某貴族の別荘の壁画」の探索譚なのだ。高橋邦太郎の戦前、戦後のほとんど手がかりなしの状態に較べるべくもないが、とにかく実物に当たるといふ美術史研究家としてのその真摯な行き方にはただ鶴首。

ふたたびフランスを訪れた1995年2月7日正午過ぎ、私はサン＝マロの駅に降り立った。その数日前にパリのホテルよりピレ氏に電話し、訪問の約束をしていた。モンパルナスから汽車に乗り、レンヌで乗り換えてサン＝マロで降りれば車で迎えにきてくれるとの、親切な申し出だった。レンヌまでは曇りがちだった空が、海に近付くにつれて明るさを増し、列車がゆっくりと駅に入るころには、うすびがさしていた。

（『異界の海 芳翠・清輝・天心における西洋』[改定版]、2006年、美術の図書 三好企画、頁27）

2月のブルターニュというだけでも想像力を膨らませられるが、「汽車」という言葉を選ばれた筆者の感覚に共感するものがあつた。だが、ブルターニュの知人に聞いたところでは今やTGVであつという間であり、クリスマス・イブあるいはその前日の切符の予約は午前9時過ぎに瞬時にして終了してしまうそうである。今夏、機会を得てレンヌを訪れた際、高階氏のレンヌからサン＝マロまでの鉄道の旅を自動車でたどってみた。9月のヴァカンスも終わろうかという時期で陽光は明るく強く、そして人出は衰えたもののまだたいしたものだった。そして、ジュディット・ゴーチエが芳翠に壁画を依頼した別荘はサン＝マロの対岸に位置するディナールにある。

「離れは当時のままです。ただ前の持ち主—というのはジュディット・ゴーチエと晩年の20年間をともに過ごしたシュザンヌ・メイエル・ジュンデルの死後、別荘を買取った人々ですが—が芸術を解さない人々であつたために、ややぞんざいに扱われていたようです。私自身、あれは何か重要なものだと感じてはいましたが、東洋の画家の作品だとはわからなかった。（中略）今でもときどき孫たちが泊まりに来たりして使っている離れなので、きちんと保存できていないのです。」

（同書、頁28）

「もうディナールです。ここも、かつてはエレガントな避暑地だったのですが、最近は醜い建物が増えて、どうしようもない。それでも夏は大変な人出です」（同上）というディナールを2月に訪れたのは恐らく僥倖というべきであろう。筆者は別荘を確認するのみでディナールを後にした

が、夏の終わりの午後、車は列をなして走っていた。高階氏はこの後、ディナールというブルターニュの別荘地にも潜む歴史の厚みというものから、見事なパリ時代の芳翠再発見へと筆を進めていくが、そこは読者諸氏にご一読願いたい。

またまた補遺の性格を逸脱しかけているようだ。ともかく、高階絵里加氏の論考によりこれまでの明治期の美術における日仏交流の全体像が深みをともなって明らかになった。帰国後の日本文化の状況と衝突したに違いない芳翠は独自に「快潤」な対応をとったようだが、パリ時代ほどまさにその美的靈感が羽ばたいたときはなかったようだ。フランスでも第三次ジャポニズムとかネオ・ジャポニズムとかでかつてのジャポニズムにも再度陽が当てられているが、このディナールの別荘の離れにある「冬も、夏も、晴れた日も、嵐の日も、あのつつましい離れの壁に咲き誇っている梅の花」（同上、頁36）はかの地の地方文化財に指定されている。

ところで、『蜻蛉集』の書名の読み方であるが、筆者はワープロでの変換では「かげろう」と入力すると直ちに出てくるのでその可能性もあると思っていた。各種辞典を当たってみても、古語では「とんぼ」のことと出ている。これについては、先日高階秀爾先生をお呼びして日仏友好150周年を記念して「美術における日仏の出会い」と題して講演をお願いしたのだが、そこではっきりと「これは〈せいれいしゅう〉と読みます」とおっしゃっておられた。

3) 復刻版『蜻蛉集』

さて、最後に筆者を意気阻喪させた復刻版『蜻蛉集』について紹介しておこう。この書の復刻はジュディット・ゴーチエの日本に関する著作集編纂に付随する形で実現された。完全復刻であるがブリジット・コヤマ＝リシャールBrigitte Koyama-Richardの「序」が付けられている。版元はEdition Synapseである。前述した高階秀爾先生の講演でも取り上げられていたが、蝙蝠を自署代わりに使った芳翠による屏絵と挿絵を色合いに変化をつけながら繰り返し配した、内容と見事に融合した、まさに豪華限定版の復刻である。「蜻蛉」つまりトンボがそれまでフランスでは気味悪いものとしてあまり注意が払われてこなかったのが、アール・ヌーヴォーのガレやラリックらがジャポニズムの影響でトンボを意匠に用いていることから、当時のジャポニズム浸透において芳翠の果たした役割は予想外に大きいようである。高橋邦太郎は西園寺公望が意識した和歌の原典探索を行っているがかなり原歌不詳がある、それについても高階絵里加氏の前掲書の注にはふたつ指摘があるのだが、一か所気になる点がある。「En désespérant...」で始まる歌を高橋邦太郎は原歌不詳としているが、「古今和歌集にある式子内親王の『玉の緒よたえねばたえねながらえはしのぶることのよわりもぞする』であり、」（前掲書、頁72）と指摘、なるほどと首肯するところであるが、高橋論文でも復刻版でも« En désespéré »となっているのだが、限定豪華本ではない版ではそうになっているのだろうか、疑問が残る。

補遺というには脱線が過ぎた「愚痴こぼし」になってしまったが、最後にさらにひとつ愚痴めいた推定を。松尾邦之助は『蜻蛉集』に言及しているのではあるが、現在まで調べた限りでは実際に読んだあるいは目にした確証は得られない。日本文化の紹介者としてパリでもてはやされ、翻訳もかなり行った松尾であるが、この豪華限定本には近づけなかったのだろうか。もし目にしていれば山本芳翠の才能に気付かないはずはなく、なにがしかの言及があつてしかるべきだからである。